

自立してはいけない

アドルフ・ポルトマンという動物学者がいます。彼は、人間はもともとから早産で生まれてきたという説を立てました（『人間はどこまで動物か』岩波新書）。半世紀以上前のことです。

普通胎児がこの世に生まれてくるのはお母さんのお腹に宿って十カ月と十日（とつきとおか）かかると言われていますが、それだけお母さんのお腹にいても、それでも人間は一年以上早産なのだと言われます。人間は脳だけが過剰に大きくなったため、母胎の骨盤がその大きさに耐えられない（通過できない）。だから、脳が小さいうちに、一年くらい早産で生まれてくるというものです。つまり人間はみんな未熟児で生まれてくるわけです。

これをポルトマンは、悲観的に考えません。一年分は、母胎の中で生理的に育つのではなくて、外界に飛び出て、社会的な過程の中で育つとポルトマンは考えました。早産した分、人間の子供は、さまざまなことを生理的に学ぶのではなくて社会的に学ぶ。そこにこそポルトマンは人間社会が自然的環境を超えて、文明を持ったり、文化を有したりする根源を見たのです。

メダカ状態に自分を追い込むな

たとえば、馬や牛の子供は、母胎から生まれ出てすぐに自力で立とうとする。数時間も経たないうちに、馬や牛の子供は、自立する。つまり馬や牛の出産は早産ではない。生まれて直後に自立的に（自分で）動ける。このことが意味することは、馬や牛の子供たちは、生まれてくる以前に自分が何であるかについてすでに生理的に決定されているということです。これは動物が、下等にならばなるほどそうです。

メダカの学校は誰が生徒か先生かわからないと言いますが、メダカの親も子供も二、三ヶ月も経てば区別がつかなくなります。文明化していかない動物ほど親と子供の区別がつかない。子供の自立が早い時期に生じてしまうということです。一気に大人になってしまふ。

ところが人間は放っておけばすぐに死んでしまうほどに自立できない。お父さんやお母さんだけではなく、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚の人々、保育園の先生、近所の人々、買い物先の店員、その他たくさんの人々に世話になってやっと歩き始めます。つまり、直接の父や母ではない、家族ではない人たちの世話にもなりながら育ちます。そういった周囲の人たちは、学校で十分学び、社会人になり、仕事をし、ときには世界を飛び回っている多くの経験を持つ人たちであります。その人たちに囲まれながら人間の子供は育つ。

動物は文字通り親が育てますが、人間は社会が育てるのです（この考えはファシズムにも繋がると批判される側面も有していたのですが、そうポルトマンは考えました）。社会的な伝承は、母親のお腹の中で生理的ではなくて、そういった社会的な環境それ自体の中で行われる。そうやって人間の胎児⇨乳幼児は、生理的な伝承よりも、遥かに多様な、文化的、文明的な要素を受け入れることができたわけですね。

生理的な自立は、したがって非文明的な自立でしかありません。つまり文明化度というのは人間の乳幼児の段階では、人間の非自立度⇨社会依存度と等しいと言えます。

独り立ちが早いメダカや牛や馬は、生理的な反応としてしか「社会」を生きる術すべを持たないために社会的な「能力」も低いわけです。『出産後』の自立度が高い動物ほど『人の言うことを聞かない』。その分、「能力」の発達も自分のDNAの中にあるものだけに直接的に支配されているため制約されているわけです。したがって、動物の社会は親の社会を反復的に模倣しているだけです。動物の場合は親を見れば子供がわかる。子供を見れば親がわかる。しかし、人間の親子は動物の親子のように単純な関係にはありません（たまには動物のように類推できる親子もいますが・笑）。

この親と子との間に生理的な関係以上の要素が入ることの根拠が「早産」ということなのです。未熟児で生まれるからこそ、必ずしも親子の関係が直接的にはならない。逆にその関係が直接的な動物には、人間のように社会に変化がない、歴史がない、発展がない。

さて、みなさんは、もはや高校を卒業して大人になろうとする寸前の状態にあります。少なくとも身体は立派に大人になっている。まさに自立しようとする寸前の状態にあります。親の世話になりたくないと思いつけるのも、この季節です。あるいはうるさい親だな、もう自分でアルバイトでも何でもして家を出たいと考え始めるのもこの季節です。

しかしよくよく考えてみてください。アルバイトをしたり、家を出たくなるというのは、言ってみればメダカ状態に自らを追い込むことでもあります。

依存とは信用のこと

独り立ちするということは、一般的には良いことのように思われていますが、私はそうは思いません。たとえば、ごく少数の特別な企業を除いて多くの企業は銀行からお金を借りて経営しています。あるいは銀行のみならず、株式会社は株主から資本を調達しています。

こういったことは、ポルトマン的に言えば、全部、「早産」状態だということです。かつてポルトマンの早産説を「モラトリアム」と言い換えた日本の心理学者もいました。これは学生時代の学生の心理状況を言い当てた言葉でしたが、もともとの「モラトリアム」の意味は、「返済猶予」ということです。

学生をモラトリアムというのなら、すべての企業は「モラトリアム」なわけです。企業はそのことによってまさに人の力をも借りてこそ大きな力を発揮するわけです。自分だけの力で生きている人と

いうのは、別の言葉で言い換えれば、誰の言うことも聞かない唯我独尊状態だということです。一見パワーがあるように見えますが、実際は一人の力でしか生きていない。自分しか自分の支持者でない状態だということです。これは美徳ではなくて悲劇です。

銀行にお金を借りれば、銀行の言うことにも耳を傾けねばならない。同じように株主の言うことも聞かなければならない。親に生活させてもらっていればたまには親のお小言に付き合わねばならない。それは友達にお金を借りても言えること。こういったことは一見不自由なことのように見えますがそうではない。そういった「交流」が物事を考えたり、考え直したり、そして深く考えたりするチャンスを生んでいるのです。

お金を借りるには、貸してくれる人を説得しなければならぬ。説得する過程で一所懸命自分のプランを練らねばならない。そうやって自分のプラン自体がより精度の高い、成功する確率の高いプランに成長していくわけです。そうやって人間は他人の経験をも自分の経験に織り込んでどんどん大きくなっていく。銀行も親も友達も、ポルトマンの言う「早産」を保護する仕組みなのです。それを経済的には「投資」と言います。投資の根本は「信用」です。自立を急ぐ人は投資も信用もされない人です。

みなさんのいまの状態で言えば、学生時代はそれ自体借金状態だということです。それは親の、みなさんへの投資であり、親がみなさんを信用してお金を出しているのです。親が子供に学費を出すのは当たり前だというのは、その意味でまったくの間違いです。

当たり前ではないけれど、だからと言ってあなた方の親孝行は「親に少しでも迷惑をかけたくない」と言ってアルバイトに精を出すことではありません。アルバイトに精を出し小銭を貯めても、それでもって（深夜まで遅く働いたがために）学校の授業中勉強もしないで寝ていたら意味がありません。あなた方は勉強すべく親に依存しているのであって、親もまた勉強させるべく投資しているので、親に直接お金（小銭）を返すことの意味などないのです。まして授業中寝ているなんてことは、親にとっては問題外のことです。大切なことは、そういった投資や信用に報いることであって、それを跳ね返すことはありません。

小銭にうつつをぬかすと一生小銭しか動かさなくなります。親に温泉旅行のプレゼントもできなくなる。逆に一生親に小銭をせがみ続けることになることが多い。そんなことにならないように、学費を気にかけるよりは気にかけた分勉強すればいいのです。返済とはみなさんの場合、学業成績を良くすることでしかありません。そうすれば、親の投資よりも何倍ものお返しができるようになるのです。

人間はうるさく言ってくれるものがあるからこそ、成長します。銀行も株主もそして親も、そしてまた「先生」もうるさい人たちの代名詞のようなものです。他人の言うことを聞くということは何かの制約のように思うかもしれませんが、それは他人の経験分が自分の生き様に付加されることなので、自分自身がさらに大きくなることだと思えばいい。自分の考えと違う人間がうるさく言うときにほど大きくなれると思えばいい。それを「成長」と言います。